

被災地からの挑戦

東北の泉を探して

NHKラジオ
明日への言葉
2012年9月12日、13日

土方 正志(ひじかたまさし)

1962年、北海道生まれ。編集者。有限会社荒蝦夷代表取締役。

著書に『ユージン・スミス 楽園へのあゆみ』(偕成社/産経児童出版文化賞)、

『瓦礫の風貌 阪神淡路大震災1995』(リトルモア)、

『てつびん物語 阪神淡路大震災 ある被災者の記録』(偕成社)など。

東日本大震災発生から1年半。自ら被災しながらも、被災地の状況を発信し続け、被災地復興に向けた活動を全力で取り組んできた仙台にある出版社が体験、そして取材した「東日本大震災」について語る。

一年半が過ぎ、復興の言葉が使われているがまだまだ。神戸の復興宣言は10年後だった。災害以前に戻りたい気と変えたい気とのバランスが難しい。復興への第一歩が始まったばかり。

日本列島に暮らしているなら何処でも、誰にでも自然災害は起こる。一端自然が牙をむくと今回みたいになる。自然災害の歴史をみると恐ろしい。繰り返す災害をどうやって記憶に留め、次に備えるかが大切。

揺れでマンションが全壊、山形に避難した。仙台学という雑誌を5、6年出していて聞き書き(皆の話をきく)は被災地体験だけではなく、被災前・被災時・今..を1年で100人位に聞いた。富山の薬売りの人にも証言を聞いた。復興には10年はかかり、100年後には、そんなこともあったね..となるだろう。

災害は繰り返されているが、かつては木造の家屋だけであったものが今は、鉄筋・コンクリートのビルが立ち並び災害を複雑にしている。色々な角度から考えねばならないが、命あってのものだねだ.....。

町の復興と被災者の復興は必ずしも一緒ではない。阪神神戸の取材を通じて感じたのは、コミュニティのしっかりした町の復興が早いということ。東京はコミュニティが弱く、4年いた仙台はコミュニティが強いと感じて12年前に仙台に戻った。

出版社の荒蝦夷(有限会社)の名は大和時代、大和の朝廷にはむかった東北住人の蝦夷(日本書記にでてくる言葉)を借りた。

東北は広く、人口が少ない。6県で一千万人位。北海道の600万人を足しても日本全体の一割ぐらい。自然が豊で可能性を秘めた地域。よく周回後れのトップランナーなんて言われる。東北のありとあらゆることを聞き書きをして証言を集めている。エリア別、職業別.....

仙台から車で30分行くと海、反対側に行くと山。東北は自然が近い。東北人は自然が近いことを知っているから自然災害の時も穏やか。自然の豊かさに生かされ、自然が牙をむくとこうなる...お爺ちゃんが言っていたこと、お父さんが言っていたこと..とはこういうことなのかと納得する。



震災特集が評価された出版社「荒蝦夷」の代表土方正志さん(右)と「仙台学」編集長の千葉由香さん

仙台市の出版社「荒蝦夷(あらえみし)」が、優れた出版活動を顕彰する梓会出版文化賞の「新聞社学芸文化賞」に決まった。2012年1月17日に東京で授賞式があった。

「被災地の出版社の責任として、この地で本を作り続けたい。受賞は励みになる」。荒蝦夷の代表土方正志さん(49)が思いを語る。

同賞は中堅出版社110社でつくる社団法人「出版梓会」の主催。「被災しながら出版活動をすぐ再開し、被災直後にまとめた『仙台学』11号は多くの関心を集めた」と評価された。

火山の噴火、津波などの自然現象がそこに人が住むと自然災害になる。

東北は自然が近いから自然災害も近く、生者と死者の間も近い。これが東北の精神風土。

記録に残すのが地元の出版社の使命だと思い仕事をしている。これらは将来へのヒントが沢山ある。東北には今回のさいがいの記録を広く深く残す研究所が必要だと思う。いまだに行方不明者は3000名。

東北の泉を探して！(汝の足元を深く掘ろう！)日本列島は自然と付き合いねばならない列島。災害は繰り返しやってくる。地域の災害の歴史は知っておいたほうが良い。また来た時に役立つ。

「また」と「もう」の話は良く出る。「もう、一年半」と聞くとギク！とくる。「まだ一年半」とはだいぶ違う。立場により言葉の響きが違う。まだ、まだです...